

2012 年度 材料工学科

自己点検・評価報告書

2013 年 3 月 31 日

目次

1. 理念・目的	
1-1. 教育目標とアドミッションポリシー、ディプロマポリシーとの整合	1
1-2. その他	3
2. 教員・教員組織	
2-1. 方針（目標）に沿った教員構成、能力・資質等の明確化	3
2-2. 学群における人事計画の適切性	5
2-3. その他	6
3. 教育内容・方法・成果	
3-1. 学習・教育目標とカリキュラムとの整合性（教育体系の構築）	5
3-2. 授業科目と担当教員の整合性	7
3-3. シラバスに基づく授業の実施	7
3-4. 卒業研究の指導状況	8
3-5. 具体的な取組内容と成果（FD/授業改善）	9
3-6. 学生支援	10
3-7. その他	11
4. 学科（学群）等運営の貢献	
4-1. 学科運営への協力状況	11
4-2. 学科運営方法	12
4-3. その他	13
5. その他特記事項	
5-1. 卒業生の社会評価など	13
5-2. その他	13

1. 理念・目的

1-1 教育目標とアドミッションポリシー、ディプロマポリシーとの整合

《現状説明》

教育目標は2004年度から開示しており、2010年度に改訂を行った。アドミッションポリシーおよびディプロマポリシーは教育目標の理念に従い2010年度に制定した。2011年度についても2010年度改訂の教育目標、2010年度制定のアドミッションポリシーおよびディプロマポリシーを継続的に掲げるものとする。

教育目標

I. 技術者・研究者としての幅広い教養と社会性

A 数学・自然科学

工学の基礎となる数学・自然科学を十分に理解し、材料工学の専門知識の修得を可能とする。

B コミュニケーション

語学、情報技術を修得し、国際化・情報化社会に対応できる情報収集・発信能力を獲得する。

C 地球・環境・社会

工学を環境問題や世界経済など、複眼的・地球的視点から見つめる素養を身につける。

II. 材料工学を問題解決に応用できる専門性

D 材料の機能・性質

金属・セラミックス・有機材料の三大材料について理解し、更に分化した各種材料の性質と用途を理解する。

E 材料物理学

材料に関する物理現象を数式で記述し、議論する能力を身につける。

F 材料物質科学

原子・分子レベルで材料の構造を理解し、物質科学に対する体系的な知識と応用力を習得する。

G 材料製造工学

材料工学で用いる製造技術・加工技術を理解し、実践できる能力を身につける。

III. 実社会で活躍できる自律的発展性

H 設計・企画

獲得した専門性を生かして、状況に応じた正確な材料選定・材料設計を行える能力を身につける。さらに製造・開発分野において、社会的課題や制約条件に対応した研究開発計画が立案できる能力を獲得する。

I 実験・解析

研究・開発の目的を達成するための実験を計画する知識と、それを実行する技術を身につける。また、実験結果を解析し考察・討議できる能力を身につける。

J 社会性・発展性

卒業後も自立的・継続的に研究者・技術者として発展できる基盤を確立する。また、自分の行動・成果を論理的に記述・発表し、国内外の社会に対する説明責任を担える能力を磨く。

アドミッションポリシー

よりよい「材料」を追求することは、現代の科学技術の最も重要な基盤の一つである。材料工学科は物質の特徴を知り、それを材料として活用する手段を学ぶ場所であり、学科の学生として以下の人物像を求める。

- (1) 材料工学の背景となる自然科学・社会科学の基礎的な学力をつけた者。
- (2) 材料工学を構成する様々な技術の基礎理論や応用展開に関心がある者。
- (3) 材料を実際に触れ、材料の製造・開発や物性評価に対して価値を見出す者。
- (4) 人類と材料の関わりに興味を持ち、将来の材料工学の発展に貢献する意欲を持つ者。
- (5) 社会の様々な活動を地球規模の視野で捉え、かつ材料工学を礎として取り組みたいと考える者。

ディプロマポリシー

材料工学科は、「材料・物質に対する高度な知性を身につけ、材料製造・開発の即戦力となる創造性豊かな人材の育成」を教育の根幹とする。本学科の学生は卒業までに以下の項目を満たすことが求められる。

- (1) 材料工学の知識・技術を基礎としつつ、より広い領域の課題を探究する姿勢を身につける。
- (2) 材料工学および物質科学を体系的に理解し、問題解決する能力を身につける。
- (3) 社会における課題を材料工学の知識を用いて多角的に分析し、解決方法を立案する能力を身につける。

《点検・評価》

1年次の導入科目である材料工学入門や材料工学概論を通じて、学生に教育目標の周知をはかっている。またこれらの科目は専任教員全員で担当しており、各年度の入学生の全体的な傾向を教員で意見交換・情報共有している。その結果、アドミッションポリシーと実際の学生像の整合を確認し、教育目標・アドミッションポリシーの点検については、定期的には計画していないものの、実際には適切な間隔で実施している。

4年次ではカリキュラムの集大成として卒業研究が主体の科目構成となる。年度末に卒業研究発表を行い、その結果と他の履修科目の成績と合わせて各学生が学習目標に到達し、ディプロマポリシーにて規定された人物であるか卒業判定会議にて審査する。その際、その年度の教育プログラムに関して簡単な総括を行い、必要であれば各ポリシー・教育目標・カリキュラム等の点検を行う。また、卒業論文研究におけるルーブリックの導入を検討しており、昨年度は発表時に教員、学生に対してアンケート調査を実施した。

以上のように、初年次教育を通じて教育目標とアドミッションポリシーの整合性を確認し、卒業判定会議で教育目標とディプロマポリシーの整合性を議論する機会を持っている。この3点の具体的な改訂・点検は専任教員によって構成されるカリキュラムワーキンググループ(以下カリキュラムWG)にて行っている。

《将来に向けた発展方策》

学科会議を中心として、上に述べた点検過程を定期的・機動的に実行できるよう規程を整備する。

《根拠資料》

学修の手引 工学部 2012

1-2 その他

《現状説明》

学内外への学習目標の公開は 2004 年 4 月より行っており、以降引き続いて「学修の手引」にてカリキュラムと教育目標の対応を表の形で周知している。教育プログラムに関わる教員への周知方法として、学習の手引きの作成・改訂を学科全教員に対して学科会議を通して報告し、その内容を審議の上確認している。その後、カリキュラム WG にて具体的な学習・教育目標に対応してカリキュラムの作成・変更が図られている。学生への周知方法として、新入生には年度始めに「学修の手引」を配布し、新入生オリエンテーションにて教育プログラムの概要と履修について説明し、周知徹底している。また、導入科目である材料工学入門の一部の時間も用いて、学習を開始した学生に対してさらなるフィードバックをかけた説明を行っている。さらに教育目標の達成およびディプロマポリシーの実行を確認するため、教育期間最終年の 4 年次の卒業研究発表会後に、一人一人の学生に対し学生の自己点検評価および教員の評価を行い、それぞれの内容および学生・教員間の達成感の相関を調査し、次年度以降の教育への反映をはかっている。

《点検・評価》

材料工学科の教育プログラムの点検・改訂は、適宜カリキュラム WG で行われる。その議論の過程は教員全員で構成される材料工学科学科会議にて報告され、必要に応じて議論の結論に対して審議がなされる。すなわち、評価スキームは学科会議で常に報告・決定がなされており、教員全員によって点検された後、承認されている。

《将来に向けた発展方策》

学科会議・カリキュラム WG を中心に PDCA サイクルを定期的に行う環境を整備し、学外への公開方法の改善を行っていく。

《根拠資料》

学修の手引 工学部 2012

材料工学科 学科会議議事録

2. 教員・教員組織

2-1 方針に沿った教員構成、能力・資質等の明確化

《現状説明》

本学科は現在、13 名の専任教員(内 2 名は特別任用教員)からなる教員組織であり、材料工学技術者となるために要求される学士教育を施すための必要にして十分な体制を構築している。教員のうち 3 名は民間企業等の経験者であり、9 名は国立研究所(現 独立行政法人研究所)・公立研究所(現 地方独立

行政法人)の出身者である。また、6名は本学以外の教育機関(大学)勤務経験を有する教員である。すなわち、産官学のそれぞれの分野で活躍した経験がある人員で構成することにより、広範な材料工学分野を実務経験と学会専門分野での活動をベースに、専門性を高めつつ教育している。教員のすべてが、本学以外に本務先として勤務した経験を有していることも、教育・研究者にとって重要な流動を経験していることであり、適切な教育判断、最適事項の選定、柔軟な取り組みなど、学科教育に関する職務に大いに活かされている。専任教員と共に専門科目を講義する非常勤講師も、同様に産官学において長く活躍した経験者を中心に委嘱しており、材料工学の先端・応用分野に関して教育することで、実社会における技術開発・商品企画への対応能力を養成している。さらに、教育支援センター教員には学科構成員ではないものの、業務の一部として学科教育についても支援いただき、教育の質と学生の理解度向上の力となっている。

各教員の専門分野は、基本的には大学院と連動した3つのコース「超伝導・高機能材料科学」、「宇宙・極限環境材料科学」、「ナノ材料・分子デバイス科学」の教育に資する領域となっている。また、より基礎的・学際的な分野を研究分野として携わることのできる人員も含めた教員構成となっており、理学的基礎から工学的応用まで幅広い学士教育に対応できるようになっている。

《点検・評価》

全般的な個々の教員及び教員組織に対する点検手段として、本学科学生卒業時に実施している「学生満足度調査」を利用している。この結果を学科会議などで各教員が意見を述べ、評価を行っている。また、定例および臨時的な学科会議、学科教授会議において、教員構成および教員資質に関する確認、非常勤任用計画、人事計画などについて、カリキュラムの検討と連動して現在の点検・評価および将来構想について議論している。年末および年度末には非常勤講師を含めた全教員で拡大カリキュラム検討会を実施し、開襟した開放的な雰囲気の中、教員組織・教育体制に関して自由な意見を交わすことで点検の一助としている。また、個別の専門科目の教育体制に対する点検材料として、履修学生に対する「授業評価アンケート」を活用している。これは授業の内容や方法などについて受講する学生からの回答を反映させることで授業をよりよい方向に改善すること、および工学部として教育上の問題点を探り出すことを目的としている。

《将来に向けた発展方策》

本学の全学FD・SD改革推進委員会が主催しているFD講演会に対して、非常勤講師を含めた材料工学科全教員に積極的な参加を促しており、着任後も継続して教育能力が増進するよう組織的に行動している。また大学院兼任教員については理工学研究科委員会が主催するFD講演会にも参加している。新任の教員は、着任年度に新任教員研修会に参加し本学の教育制度に詳しく触れる機会を得ている。本学は2008年度より行動指針「チャレンジSIT-90」の一環として、FDの強化及び見える化に取り組んでいるが、本学科はこの全学的活動に率先して参画することで、各教員の能力改善に努めている。今後は、これらの行動指針に加え、さらなる教員資質の向上をはかるため、積極的な取り組みとして教員相互間の教育方法、指導方法に関する議論の場を学科会議にて展開している。

《根拠資料》

材料工学科 学科紹介パンフレット

2-2 学群における人事計画の適切性

《現状説明》

材料工学科では、1)で述べた学科教育に要求される教員構成を維持・発展すべく、教員の専門分野と共に年齢構成にも配慮して慎重かつ計画的に人事を行っている。専門分野については上記の3コースを中心に、教員の定年退職等によって教育目標と教員組織に齟齬が発生しないよう採用計画をするように考慮されている。年齢構成は学科運営を円滑にするためにも、今後長期の教育が可能な年齢から、多大な経験を有して学科教育の中心となる年齢まで幅広く分布しており、特定の年齢層に集中しない人事計画となっている。材料科学・化学群においては、材料工学科の人事計画を踏まえ、同一学群の人事計画について意見交換・検討を行っている。

《点検・評価》

材料工学科会議にて新規教員採用時を主な機会として、専任教員の年齢構成と専門分野を記した資料を全教員に配布し、学科としてこれまでの人事計画の方針を評価・確認している。また、その時に新たな人事採用計画については更に議論した上で合意している。材料科学・化学群において適正な教員構成であるかを確認し、新たな人事計画については専任教員、特任教員に限らず、非常勤講師に関する必要性から採用に至るまで、学群内での合意のうえ進行しており、その後の点検・評価についても学群により随時行っている。

《将来に向けた発展方策》

教員採用時には、すべての教員が応募者の公募書類を閲覧し、候補者選定の議論に参加している。学科教授会議により人事計画の責任を認識すること、必ず学科として、全教員の合意を得て人事計画を実行することで、安定した学科運営を行う予定である。また、同一学群内での授業交流などを行っているため、今後はさらに材料科学・化学群において人事計画に関する適切性を確保する学群内での意見交換および会議を推進する方針である。

《根拠資料》

材料工学科教室会議議事録

2-3 その他

特になし。

3. 教育内容・方法・成果

3-1 学習教育目標とカリキュラムとの整合性（教育体系の構築）

《現状説明》

本学科の学習教育目標は、学士教育の基盤の確立(目標 I)、専門知識の獲得(目標 II)、材料工学技術者の完成(目標 III)に大別されており、以下に述べるように I→II→III と軸を移しながら目標を達成

するようなカリキュラムの年次構成となっている。各目標で中心となる専門科目は必修科目に指定している。特に実験やゼミナール・卒論研究を主体とする III においては特に多くの科目を必修科目としており、ディプロマポリシーで謳っている「工学技術者としての持続的な成長ができる人材になること」を学生に義務づけている。

1、2年次では工学部共通科目で基礎学問を徹底的に修得し、これらの基盤的科目と環境や情報関連の専門科目とをあわせて、学習目標 I に示すような幅広い教養と社会性を身につける。また、1年次での専門科目は材料の性質や材料工学的な物理学・物質科学を基礎から積み上げていっている(学習目標 II d-f)。2年次においては、更に発展的な専門科目を受講し、加えて設計、実験といった応用的な(学習目標 III)科目もカリキュラムに加えている。

3年次では講義科目と共に材料基礎実験、材料工学実験という実験科目が大きな比重を占める。これら実験科目で、材料の製造、開発、研究などどの分野でも必須である各種の技術を体得し、データの解析法を修得する。講義科目も目標 II. g に相当する、より創造的なものに比重が移る。また、少人数ゼミナール形式による「ゼミナール 1、2」や、材料技術者としての社会観、倫理観を醸成する「材料リサイクル」「材料の技術史」などといった特徴的な科目があり、材料工学の理解の深化が行われるようになっている。

4年次にはカリキュラムの主体は卒業研究となる。各研究室に配属され、卒業研究を行うことで研究者・技術者としての総合的な資質を伸ばしていく。期末に卒業研究発表を行い、目標 III が達成されたかどうかを判定する。

以上のように、カリキュラムは教育目標に整合するように設定している。これら教育目標とカリキュラムの関係は「学修の手引」に年次スキームとして明示している。

《点検・評価》

各講義科目が教育目標の達成に資する物となっているかどうかは、教員組織の点検・評価でも述べた、「学生による授業アンケート」を中心に各教員が点検している。それ以外では下記の点検を行っている。

1、2年次では学習目標 I (幅広い教養と社会性)に対応する科目を中心に教育を行っているが、中でも工学部共通科目である基底科目の修得が学生にとって大きな比重をしめる。工学部全体で行っている共通系教員からのクラス担任への履修状況の通知書などが、教育目標に対応した学習が達成できているか点検するために活用可能となっている。

3年次の材料基礎実験、材料工学実験という実験科目は教員全員担当科目であり、大学院生(TA)も交えた実習指導にて気づいたことがあれば学科会議にてクラス担任が簡単に取りまとめて報告している。教育目標 III の骨格をなす科目であり、本学科の学問分野として実験科目を重要視することから、その点検は教員が高い関心をもって行っている。

教育目標とカリキュラムの関係は「学修の手引」によって全教員が容易に把握できるようになっており、また、カリキュラムの改訂に対応して図表も修正している。

《将来に向けた発展方策》

材料工学科会議を中心として行っている上記の点検・評価をより洗練された PDCA サイクルを実行するために、小委員会や規定を整備しカリキュラムの整合性について改善を行っていくことを検討してい

る。また、教育目標およびディプロマポリシーの達成により、カリキュラム修了後の人材確保が責務であるため、適正な社会貢献を果たせる人材教育と人材配置の重要性を鑑み、就業力向上のために、導入教育、少人数ゼミ形式授業、社会観・倫理観教育、実験・演習科目の強化および内容改善、見直しを実践していく方針である。

《根拠資料》

学修の手引 工学部 2012 (材料工学科専門科目配置表)

3-2 授業科目と担当教員の整合性

《現状説明》

本学科教員は、全 13 名(特任 2 名を含む)が在籍している。全員が博士号を有しており、材料工学の研究活動を教育に反映させていると言える。また、民間企業での実務経験を有する教員が存在し、現代社会が求める人材に対応した工学者教育が適切に行える体制となっている。社会・教育現場等における経験豊かな 8 名の非常勤講師が専門科目(共通系工学科目を含む)を担当し、本学科の専門教育は幅広くかつ多様性に富んだものとなっている。

これら各教員が担当する授業科目は、学科会議において各教員の専門分野、経験を考慮して決定しており、現状の教員構成の中で最も合致したものになるべく調整されている。多くの教員が現担当科目以外の授業科目も担当可能であり、教員の入退職による教員構成の一時的な変化があっても授業科目と担当教員の整合性は充分担保されている。これまでも、教員異動による担当者の欠員が生じた場合も、調整可能な範囲で、現学科在籍教員による担当により授業科目・学科教育の支障なく実践している。

《点検・評価》

各教員が担当している授業と各教員のプロフィールは教員プロフィールに記載されており、必要に応じて各教員が確認・点検している。また、年末のカリキュラム検討会では、授業科目と担当教員の整合性を維持しつつ、各教員の時間的スケジュールも勘案して担当科目の再調整を行っている。

《将来に向けた発展方策》

教員相互が意見交換することによる改善に加え、授業アンケートによる学生の評価を利用し、各教員が担当授業を改善できる仕組みとなっている。学科会議においても、授業科目と担当教員の整合性については議論し、各学年のクラス担任やカリキュラム WG を中心として、常に点検・評価・見直しをはかることを推進する。

《根拠資料》

教員プロフィール 2012

3-3 シラバスに基づく授業の実施

《現状説明》

本学工学部では各講義についてシラバス中に①講義の概要、②達成目標、③評価方法、④教科書・参考書の記述と、15 回分の①授業計画と②講義の準備を明記することが義務づけられている。そのシラバスはホームページ「芝浦工業大学シラバス検索システム」で開示し、学生自身が必要としている科目の

シラバスが自由に閲覧・印刷できるようになっている。本学科は JABEE コースを受審していないが、一部の科目については、本学科の学習教育目標との対応についてもシラバスに記載している。

また、シラバスどおりに授業が実施されているかどうかについては、授業アンケートの調査項目の一つでもあることから、学生の意見が容易に確認できるようになっている。アンケートの結果はホームページ上で学内に開示されている。さらにこれに対する担当教員コメントも入力して表示できるようになっており、これらのシステムを通じて、シラバスと講義内容の一致が計られるようになっている。

《点検・評価》

シラバス作成および開示、その確認・評価については整備された結果良好に運用できている。新規非常勤講師のシラバス作成において必要であれば、専任教員が点検・助言するよう配慮している。ある科目がシラバスの内容に即した教育が実施されているかどうかについて、カリキュラムでの上位科目の担当教員が有益な助言をカリキュラム検討会などで行う事例もある。また、授業履修学生の授業アンケートにおいても、シラバスに基づく授業の実施について点検するばかりか、アンケートに対する教員コメントについても、積極的な入力を学科会議にて確認しており、点検・見直し、学生の意識との整合をはかることで、シラバスの重要性を認識している。また、授業開始時（開講日）にシラバスの内容を学生により詳しく説明し、授業内容、シラバスの詳細に対する学生の理解を助けることを学科会議にて確認していることは、シラバスに基づく授業の実施に関する点検にも繋がる重要事項であると評価している。

《将来に向けた発展方策》

本学科の学科会議ではカリキュラムの改訂時に WG を発足して、適宜カリキュラム及び講義内容について議論する場ともなっている。今後は WG を常在化させてより洗練された PDCA サイクルを回すことを検討している。各科目間の教育内容の不必要な重複、必要な反復を調整することで、シラバスの内容を学習目標の達成に最適化すること、シラバスに即した授業が実施されていることを点検することがその WG の目的である。また、入職教員については、シラバスに基づく授業の実施の重要性を説明すると同時に、シラバスによる科目と教育目標の関係、科目ごとの達成目標、科目ごとの授業内容を確認することを勧め、総合的・統一的・系統的・補間的授業構成（カリキュラム構成）の理解を促すことを進めていく方針である。

《根拠資料》

工学部の教育点検システムフロー図

3-4 卒業研究の指導状況およびルーブリックの導入検討について

《現状説明》

本学科では、1名の専任教員が1研究室を担当している。卒業研究を実施する準備として、本学の3年生が前期・後期に必修科目として「ゼミナール1」「ゼミナール2」を履修し、各研究室に配属されることで、卒業研究に対する予備的な知識や問題解決能力を得る。4年次前期から改めて研究室の配属がなされて、卒業研究を実施する。卒業研究の評価として、各学生の日頃の研究活動に対しては指導教員（卒業研究担当教員）が、卒業研究発表については各会場の主査が評価する。卒業研究発表後、判定会議にて主査が全般的な報告を行い、それに対して必要であれば各教員が研究活動に関する報告を簡単

に付け加えることで卒業研究の評価がなされる。なお、評価に際しては卒業研究の概要ならびに卒業論文を全教員が審査することが可能である。さらに、卒業研究発表会、判定会議後の臨時学科会議において、判定会議の結果である卒業研究評価（判定）について全教員による承認をもって最終的な評価としている。

指導教員は研究室に在室する限り学生とコンタクトが取れる環境を提供し、学問的知識だけではなく材料工学技術者としての解決能力・企画力を教授する。

《点検・評価》

各研究室の卒業研究指導については卒業論文を全教員が閲読できる期間を約1週間確保しており、教員相互により助言・評価ができるようになっている。学科全体の卒業研究の指導状況も卒業研究予稿集などの成果物によって毎年点検・評価されており、長年に渡って安定的な指導がなされていると言える。しかしながら、少子化に伴って学生の学習意欲や資質の多様性が広がっていること、就職活動が長期化してより密な就職指導が必要になっていることなどの近年の状況の変化について卒業研究指導法も変化させていくべきと言う意見が学科会議などで出ている。

また、昨年度は卒業研究に対してルーブリックを導入し、教員、卒論生へのアンケートをもとに学習教育目標および行動特性の検討を行った。以下の5項目を設定し、3段階のレベル（十分達成されている、中間、不十分である）で回答をしてもらった。

1. 自分の専門分野と研究テーマの背景をよく理解している
2. 卒業論文において解決すべき課題および結果が明確に提示されている
3. 制限時間内で論文の内容をバランスよく発表している
4. プレゼンテーション用資料が分かりやすく構成されている
5. 相手の質問を正しく理解した上で、自分の意見を明確に述べている

アンケートの結果（学生96名、教員12名）、項目1～4においては十分に達成されたとの評価が45～53%であり、卒業研究の結果やプレゼンテーションに関しては一定の成果があがっていることがわかった。しかし、項目5については十分に達成されたとの評価が25%であり、教員、学生ともにコミュニケーションの能力の不足を感じ、向上させる必要性を認識していることが明らかとなった。

《将来に向けた発展方策》

上で述べたような卒業研究指導方法・スケジュールの改訂に関しては、毎年の卒業研究発表会・判定会議などで議論されており、今後将来策について検討が進められる予定である。特に、卒業研究配属や卒業研究発表会、概要提出、卒業論文提出の日程を含めた最適指導方法をさらに検討していく方針である。また、昨年度のアンケートの結果をもとに、本年度の卒論発表会におけるルーブリックの導入を検討している。

《根拠資料》

学修の手引 工学部 2012
卒業研究概要集

平成 24 年度工学教育研究講演会講演論文集、「卒業論文研究におけるルーブリックの導入検討」(2-331)、湯本敦史 他

3-5 具体的な取組内容と成果 (FD/授業改善)

《現状説明》

本学工学部が実施している学生による授業評価アンケートは、現在は 2003 年に設置された教育開発本部の各部門が行っている。これまで本学科はこの授業評価アンケートの適用科目の拡大に努めてきており、工学部全体で全科目に適用する現在に至る前からアンケートを授業改善に利用するスキームに速やかに対応してきた。

また、先にも述べたように本学の全学 FD・SD 改革推進委員が主催している FD 講演会に対して、非常勤講師を含めた材料工学科全教員に積極的な参加を促しており、着任後も継続して教育能力が増進するよう組織的に行動している。「チャレンジ SIT-90」として、本学が FD の強化を全学として取り組んでいるのに積極的に対応しているといえる。

《点検・評価》

本学の工学部長室、学長室、教育開発本部が求めている、工学教育プログラム及び教育システムの検証と評価について本学科は速やかな対応に努めている。それ以外では、学科会議・カリキュラム検討会の場で議論することで点検・評価を行っている。特に、授業科目、カリキュラム内容と教育目標の相関だけではなく、学生の修学意識や教育目標およびディプロマポリシーと授業科目内容の詳細までを常に点検、見直しする姿勢を重要視し、学科会議等の議題として頻繁に検討している。

《将来に向けた発展方策》

本学科 3 年次の専門教育の核となる材料基礎実験 I、II、材料工学実験 I、II について、課題数を減らす代わりに 1 課題の実験工程数を増やすような改善案が提案され、学科会議で検討が進められている。また、各科目の授業内容の改善や大局的なカリキュラムの改善策を今後の課題として取り組んでいる。また、各実験の資料を学生が各自でダウンロードできるようにするなど、学修環境の改善にも取り組んでいる。

《根拠資料》

「チャレンジ SIT-90」作戦 基本計画書
材料工学科会議議事録

3-6 学生支援

《現状説明》

学生支援の本学全体のシステムとして、シラバス検索システム、学習サポート室、学生相談室などが整備されている。なかでも、2005 年度より大宮キャンパスにおいて開設された「学習サポート室」にて、数学、物理、化学、英語について共通科目の専任教員が個別指導を行っているのが基底科目の修得（認定）を目指す本学科学生の大きな支援となっている。このサポート室では本学科の専門科目についても指導を求める事例があり、特に本学科学生に資する存在となっている。さらに、必ずしも勉学に関わら

ない問題にも対応するため学生相談室を置き、専門のカウンセラーが相談にあっている。また、本学科在籍経験を有する教育支援センター教員による学習サポートおよび相談対応も、学生支援として大いに機能している。

図書館・学術情報センターなどの学生支援施設においては本学科の学生は「電子ジャーナルによる文献入手」、「SciFinder Scholar による文献検索」、「ChemDraw による化学構造式描画」、「DeltaGraph によるグラフ描画」などの処理をすることができる。後者の2点は、本学科は同一学群である応用化学科と共同で予算措置をしている。

次に学年担任制度に基づき、1年次には材料工学科専任教員2名(1名は副担任)と共通科目系の専任教員1名の計3名、2年次から4年次までは材料工学科専任教員1名がクラス担任を担当している。各クラス担任は各学年の学生の学業および学生生活の相談に対応している。クラス担任を中心として、成績配布時やその他個人面談等により、学生の学業および生活の悩みや相談事に対応し、学生と顔を合わせることで、学生と時間を共有することを実践している。さらに、3年次以降は、必修の材料基礎実験・材料工学実験・ゼミナール1、2により、専任教員と学生がコミュニケーションできる環境である。4年次においては、クラス担任の就職相談等も行われるほか、卒業研究の指導教員(担当教員)により学業に限らず進路や生活等に関する密な相談体制を実行し学生支援の柱としている。

また、各教員のオフィスアワーは、各科目のシラバスに記載されているほか、学生に配布されている「教員プロフィール」にも記載されている。

《点検・評価》

上記の様々な学生支援策の実施により、学生の学修に大きく効果が出ていると考えている。一方、学生の意思疎通能力の低下や学習意欲の低下が問題になっており、現在の学年担任制度だけでは対応できないような事例も増えつつある。したがって、学生支援については各クラス担任のみの問題として捉えず学科全体あるいは学科教員共通の認識化をはかるよう学科会議等で取り上げている。

《将来に向けた発展方策》

間接的であるが、学生教員相互の意思疎通の一助となりうるのがGPAの導入であると考えられる。学生個人の総合成績の把握・評価が教員・学生共に数値として扱えるので、学生支援の円滑な実施に資するものと考えられる。また、クラス担任の増加などの施策も、改善の手段として視野に入れている。学生満足度の低下(低化)は、教育環境や指導方法、授業内容、就職・進路などの問題であるとも考えられるが、その一方で学生支援体制に資するところも大きいと考えられる。上述のとおり本学科にて実践しているが学生と顔を合わせる、学生と時間を共有することを重視し、学生と教員の意思疎通、相互理解の方法をさらに進化および深化させる方策を検討中である。

父母懇談会に代表される家庭と大学あるいは、家族と教員の情報共有、共通認識は、学生・家族・教員の連携体制の重要事項であるため、連携強化を精神的な学生支援の中核として位置づけることを進める方針である。

《根拠資料》

教員プロフィール

芝浦工業大学 Web ページ(学生相談・芝浦学生応援ツール S*gsot)

3-7 その他

特になし。

4. 学科（学群）等運営の貢献

4-1 学科運営のへの協力状況

《現状説明》

学科運営では、各種委員会や入試業務、授業・教育関係のカリキュラム検討、入試関連の見学会、学科説明会、模擬授業、オープンキャンパス、社会貢献（地域貢献）の各種出展、父母懇談会など学科で運営すべき仕事を学科主任が把握し、材料工学科会議にて担当が決定される。決定の際には、各教員の積極的・意欲的貢献を優先しつつも、各教員の負担が偏らないように考慮されつつ合意形成がなされる。本学科全教員対応が可能な業務については、全教員参加を推進している。

《点検・評価》

材料工学科会議では、各教員の負担の平等化を含め、システマティックな運営や各種提案が行われており、上記運営方法について点検・評価が行なわれている最中である。現在では、各教員個人の学科運営に対する熱意と協力的な高い意識によって、円滑な学科運営がなされており、協力状況は極めて良好である。

《将来に向けた発展方策》

学科会議にて煩雑な学科運営業務・担当をより整理して一覧できるよう検討中である。さらに、新規採用人事を行う場合には、面接時に本学科の運営方針を伝え、合意を得てから採用するように配慮する予定である。今後、学生教育のさらなる充実、学科業務、校務の増加に対応すべき運営方法を学科会議等にて検討している。

《根拠資料》

材料工学科会議議事録

4-2 学科運営方法

《現状説明》

主任会議の伝達方法としては、2011年度は主任会議と同一の金曜日に学科会議を開催し、そこで工学部における重要事項が全教員に伝達されている。学科会議を欠席した場合には、学科会議資料が配布されることで、情報の共有を図っている。学科会議議事録は、学科会議の書記担当教員が作成し、次回学科会議などで全教員の承認をもって確定される。これらの資料は材料科学・化学群の書記センターに保管され、全教員が自由に閲覧できる。主任会議内容以外についても、定例（ほぼ月例）の学科会議において報告、審議、承認等がなされる。緊急を要する案件については、臨時学科会議および電子メール会議により、同様の措置が行われる。

《点検・評価》

材料工学科会議にて、自己点検を行っている。上述の現状から学科教員の共通認識、学科業務対応などの学科運営は概ね滞りなく、支障なく行われており、学科運営方法としては適正であると考えている。

《将来に向けた発展方策》

現状は特に問題なく運営されており、学科運営方法に関する課題は少ないと認識されるが、今後の学科対応業務の増加や学科運営の効率化のために、必要に応じて定期的に学科会議等で点検・改善を行う予定である。

《根拠資料》

材料工学科会議議事録

4-3 その他

特になし。

5. その他の特記事項

5-1 卒業生の社会評価など

《現状説明》

本学科卒業生の進路は、大学院進学約5割を除いて、製造業3割を含む多くの業種の職業人を社会に輩出している。進学後も大学院修了時に製造業を中心に優秀な人材として採用されており、社会の評価は非常に高いと言える。採用関係の企業からの大学訪問や企業・大学間の意見交換などからも、就職後の本学科卒業生の活躍や採用への期待の声は多く、卒業生の社会評価が高いことが直接的に実証されている。企業の本学への求人活動に、本学科の卒業生が直接参画することもあり、卒業生の高い評価が好循環をなしていることが伺える。

一方、毎年夏に全国9会場で開催している父母懇談会においては、卒業生の親睦団体である校友会の地方組織も参加し、卒業生の高い評価を即時的に確認することができる。

また卒業生に対しては、大学規模ではホームカミングデー（大学同窓会）が、また学科では里帰りゼミ（研究室同窓会）が適宜開催され、社会人としての卒業生の大学に対する要望等を受け入れる窓口が存在している。企業人として、卒業生の改善・提案や良好な研究室運営等のアドバイスを適宜受け取ることができ、それらに対して改善を加えるようにしている。

《点検・評価》

卒業後時間を経た卒業生の社会評価について、キャリアサポート課がそのデータの獲得に動いている。本学科はその動きに協力すると共に、ホームカミングデーや里帰りゼミの積極的な参加によって、独自に卒業生の社会評価の点検と、学習指導へのフィードバックに努めている状況である。

《将来に向けた発展方策》

現在の教育システムを継続かつ発展させ、安定して社会から高い評価を得る卒業生を輩出することを目指し、キャリアサポート課との連携を密接にし、上記点検・評価の状況を更に改善する。また、教育目標やディプロマポリシーの達成による人材の育成、社会への輩出を継続することに加え、企業人、社

会人として学科を卒業していく人材として、社会や産業に根ざした就業力を養成することが必要であり、就業力向上を目指したカリキュラム改善を計画中である。

《根拠資料》

企業による卒業生評価アンケート結果（キャリアサポート課資料）

父母懇談会アンケート結果

材料工学科卒業生就職先一覧

5-2 その他

特になし。
